

生誕 150 年 リヒャルト・シュトラウスの『四つの最後の歌』

2014 年はリヒャルト・シュトラウスの生誕 150 年にあたります。
彼の代表作のひとつである歌曲『四つの最後の歌』をご存知ですか？



リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864~1949)

ドイツ、ミュンヘン生まれの作曲家、指揮者。父親は宮廷歌劇場の首席ホルン奏者。幼いころからピアノ、ヴァイオリンを学び、作曲の才能を発揮した。初期の作品はブラームス等の影響をみせていたが、その後リスト、ワーグナーの後継者として交響詩やオペラの作曲において高い評価を受ける。

【シュトラウスと歌曲】

シュトラウスが歌曲を初めて作曲したのは 6 歳のとき。また、最後に作曲をしたのは他界する数か月前。途中オペラの作曲に専念していた時期もあったが、生涯を通じて 200 曲に近い歌曲の作曲をしている。彼にとって、歌曲は大事な作曲カテゴリーであったといえるだろう。その理由のひとつかもしれないのが、彼の妻パウリーネがソプラノ歌手であったこと。シュトラウスの歌曲は女声に合うものも多く、パウリーネが歌うことを少なからず想定していたのではないだろうか。

【『四つの最後の歌』とは？】

ソプラノとオーケストラのための 4 曲から成る歌曲。全て 1948 年に完成した。これらはシュトラウスが他界するまでに出版されなかった歌曲で、彼の死後、友人であった出版商のロートによって『四つの最後の歌』としてまとめられた。シュトラウス自身がこの 4 曲に関連性をもたせて作曲したかどうかは定かではないという。1983 年に歌曲「あおい」が発見されるまでは、シュトラウスの最後の作品と思われていた。4 曲は次のとおり。(曲順は出版の楽譜による。)

第 1 曲：春 第 2 曲：九月 第 3 曲：眠りにつくとき 第 4 曲：夕映えのなかで

第 1~3 曲にヘッセ、第 4 曲にアイヒェンドルフの詩が用いられ、④→①→③→②の順番で作曲された。初演は 1950 年ロンドンで行われ、その際の録音が現在に残っている。 請求記号：3L7.25

【「夕映えのなかで」への想い】

第二次世界大戦後ドイツは物資不足によって生活が厳しくなり、加えてナチス・ドイツに協力したとされていたシュトラウスは裁判にかけられるなど精神的な苦痛を強いられていた。このため、知人の助けからスイスへ渡り生活することになる。そのようななか「夕映えのなかで」の詩に出会ったといわれている。苦しい時も嬉しい時も一緒に歩んできた二人が、あちらこちらをさすらった後、夕映えの景色のなかで死に想いを馳せるという内容の詩に、シュトラウスは深く共感。自分たち夫婦の姿を重ねたという。夕映えの景色、鳥のさえずりなど、その情景が目浮かぶような音楽は、シュトラウスにとって思入れの深い詩によって引き出され、生み出されたのである。

♪音楽資料室では 20 点以上の「四つの最後の歌」の音源資料を所蔵しています。一部をご紹介します♪

3L3.14(デラ・カーザ/バーム/ウィーンフィルハーモニー管弦楽団)、1Q6.16(ロット/N.ヤルヴィ/スコティッシュナショナル管弦楽団)、1Q1.45(シュヴァルツコプフ/セル/ベルリン放送交響楽団)、1Q8.28(ポップ/ティルソン・トーマス/ロンドン交響楽団) ※括弧内はソプラノ/指揮/オーケストラの順

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



【音源資料】

『ストラヴィンスキー：「火の鳥」組曲（1919年版）、「春の祭典」』

ヤンソンス（指揮）ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団 請求記号：4C3.02

「火の鳥」といえば、先日のソチオリンピック開会式でも演奏されたのが記憶に新しい。バレエ音楽として1910年に初演されたこの曲は、その後1911年、1919年、1945年にそれぞれ組曲版が作られ、現在4つの版が存在する。このCDで演奏されている1919年版は、全曲から聴きどころが凝縮され、最も演奏機会の多い版でもある。指揮者を含め、奏者一人ひとりの音、心を感じさせる、豊かな響きがいっぱい。特に終曲での幸福感に満ちた音楽は、身体にしみわたる。「火の鳥」のほか、同じくバレエ音楽「春の祭典」も収録。

『加羽沢美濃：24のプレリュード』 加羽沢美濃（Pf） 請求記号：6J7.72

作曲家として、ピアニストとして、また最近ではテレビのクラシック音楽番組でも司会役としても活躍し、多岐に渡る活動をしている加羽沢美濃。彼女がピアノのために作曲した24曲から成るプレリュード集が、自身の演奏で収録された。24の異なる調性でひとつひとつ書かれた音楽には加羽沢のイメージによる副題がついているが、これにこだわることなく、弾く人が、聴く人が、それぞれに風景や想い、色合いを感じてほしいとのこと。伸びやかで、さまざまなイメージが膨らむ曲ばかり。

【図書】

『クラシック大好き！神奈川フィルの名曲案内 オーケストラの楽しみ方がわかる！』

神奈川フィルハーモニー管弦楽団監修、メイツ出版 請求記号：3.1-K965-13

オーケストラってなんだろう？どんな楽器があるのかな？どんな音楽を演奏するのかな？
こうした疑問に、丁寧にわかりやすく解説してくれる一冊。オーケストラ、クラシック音楽の基礎知識の紹介から始まり、名曲の聴きどころなどが詰まっている。そしてこの本の特徴といえるのが、オーケストラの楽器がそれぞれ活躍する楽曲を、現役の楽団員が紹介しているところ。実際に演奏する側の人の声が聞けるのは貴重だ。楽団員たちの思い入れのある曲の紹介なども興味深い。

♪はじめてクラシック♪

クラシック音楽初心者の方にも楽しんでいただけるような資料をご紹介します♪

シューベルト作曲：「糸を紡ぐグレートヒェン」 請求記号：Y101.4、1Q8.66、1Q1.27

31年の短い生涯のなかで600曲にも及ぶ歌曲を作曲したシューベルト。「糸を紡ぐグレートヒェン」は彼が17歳のときの作品。この曲はドイツ歌曲史上重要な曲とされている。それまで歌曲といえば民謡の延長線上で、わかりやすい旋律に簡易的な伴奏が付くのが一般的だった。この曲は主人公の言葉を表す歌唱部と、情景や主人公の心情を表す伴奏部によって、詩の世界が見事に表現されている。シューベルトの多くの作品のなかでも高い芸術性を持った一曲。彼のこうした創作ののち、ドイツ歌曲はシューマン、ヴォルフ、R.シュトラウスらの作曲家によって発展していった。糸車の回転と詩の主人公の心情がともに変化していく部分は必聴♪